

あ  
な  
た  
だ  
け  
今  
晩  
は  
P  
a  
r  
t  
・  
5  
上  
演  
台  
本

鳥  
賊  
ホ  
テ  
ル

一九九四年八月二十三日～二十六日

(於・新宿シアタートップス)

「人物」

にしがい いちのすけ

西貝 一之介 (四十五歳)

かめだ じろう

亀田 二郎 (四十歳)

ながおか たかし

長岡 隆 (三十五歳)

こいずみ しょうた

小泉 正太 (三十歳)

音楽“ C A S A B I A N C A ”

明かり入ると、ひとりの男が、水色の封筒と便箋を手に立っている。  
長岡隆である。

隆

(手紙を読む)“前略ごめんくださいまし。

急のおたより、おゆるしくくださいまし。

来る八月十日のひ、

封筒のうら書きのところまでおはこびくださいまし。

汽車の駅からバスは走っています。

バスをおりて海のおいがしたら、

イカホテルはどこですかと聞いてください。

おかあさんとこにきてください。

長岡隆さま。

小泉とわ”

・・・小泉とわ・・・?

隆、手紙から目をあげる。

遠くから、イカの鳴き声。

隆の明かり落ちる。

音楽、暫し残ってF・O

舞台に明かり入る。午後。

練乳色の海辺の家。築約五十年。正面にドア。

ドアをはさんで左右に窓。そこからは、浜が望めるが、今は閉まっている。

窓には貼り紙（もちろん表にむいて）“売家（※赤字で）連絡先・亀田不

動産烏賊浜支店・TEL〇〇―××××”と書かれてあるのが見える。

舞台は、ひろい三和土または土間といったふうなのであるが、いわゆる、

おしんが出てきそうな日本の田舎風ではなく、どこか西洋の匂いにする。

窓枠や柱などは、アイボリーのペンキ塗り。

下手の壁に、備えつけの木製のベンチ。

舞台上手に、ドア（閉まっている）奥は台所。

土間には、古ぼけた籐の椅子が二脚。

窓にかけられた色あせたカーテンは、脇でまるめて結ばれてある。地味な  
麦わら帽子、空きビン、ダンボール箱、蚊とり線香のブタ、女物のサンダ  
ルなど。

全体的に西洋風に建てられた家を、日本風に住んでいた・・・という雰囲気  
が欲しい。

どれもこれもうつすら埃をかぶっている。

舞台やや前方に、木馬があり、もしかすると、これがこの家をどこか“西

洋風”に見せているのかもしれない。

木馬は、三歳くらいまでの子供が乗れる程度の大きさのもので、この家と同じくらい古く、ペンキもはげているが、なかなかしつかりした造りである。

ドアの向こうから声がする。

二郎

建物は、かなり古いんですが、ま、作りはしっかりしてますから。

鍵をあけて、亀田二郎、ドアから入ってくる。携帯電話を手首からぶらさげている。

続いて、西貝一之介。鞆を手にかけている。

二郎、窓を開ける。初夏の浜の光と、波の音が入ってくる。

二郎

眺めはいいですよ・・ちよつと生臭いスカね。

一之介、木馬に目をとめ、はつとする。

二郎

このあたりはイカの産地だからね。ヤリイカにケンサキ、なんでも捕れるけど、ホタルイカが一番有名かな。今自分は、夜になるとキラキラ光ってね、とれたては美味しいんだこれが。あ、あっちに見えるの、あれ、イカの加工工場スよ。

一之介

・・そう・・。

二郎

一年くらい前まで、ばあさんがひとり住んでいたらしいんですが、入院

しちゃったとかでね。一、三ヶ月前かな、もう戻ってこれそうもないってんで、売りに出たんですよ。

一之介 戻ってこれそうもない？どういうこと？

二郎 さあ、詳しいことはねえ。

一之介 ……

二郎 なんだよ、埃だらけじゃねえの。お客さん案内すつから掃除しとけつて言つといたのに。

一之介、木馬に触る。かすかに揺れる木馬。

二郎 ……。ガラクタは、こつちで処分しますから。ま、ちよつと手を入れれば結構住めるようにはなりますよ。なんなら、業者を紹介しましょうか。勉強させますから。

一之介 いや…。

二郎 …ねえ、お客さん。別の物件もあるんですけどね。

一之介 え？

二郎 浜の向こうっ側なんすけど、宅地造成しましてね。このご時制ですから、かなりお買い得です。スーパーもあるしね。このあたりじゃ、ほら、さつき車で通ったでしょ、あの雑貨屋がせいぜいですから。ろくなものないし奥さん、日用品に困るんじゃないかな。

一之介 わたくしは、独身ですから。

二郎 あ…そうなんすか…。じゃ、よけい、ご不便でしょう。あつちのニュータウンなら、その点、まったく心配ありませんよ。スーパーでしょ、郵便局、銀行もできましたしね。温泉つきの健康ランドもこの夏、オープン

します。駐車場の設備があるでつかいやつで、温水プールにサウナでしょ、あ、カラオケバーもできるって話で。たしか、あそこ、まだなん区画か残ってたとおもいますよ。ちょっと会社に確かめてみますね（ト、携帯電話をダイヤルしはじめる）

一之介 （止めて）いや、いい。

二郎 え？

一之介 そういうにぎやかなのは、どうも・・・。

二郎 は・・・そうですか？

一之介 週末に、ゆっくり本を読めるような家をとっているから。

二郎 なるほど。ゆっくり読書ね。大学の先生は言うことが違いますねえ。それじゃまあ、ここは、ぴったりというか・・・静かなことは静かですから。

一之介 そうね。

イカの鳴き声。

一之介 何？

二郎 イカですよ（窓から覗いて）ほら、水揚げしたやつを樽に移してるでしょ。あん時にね、ピューピュー鳴きやがるんですよ。

一之介 イカが鳴く？

二郎 いや、水を吐き出してる音なんですけどね。なんだか、みじめっぽい音だよねえ。鯨が潮を吹くなんてのは豪快でいいけどね。パイパイヒイヒイだもんなあ。ま、一匹のイカにも五分の魂ってのかね。

一之介 一パイ。



二郎 へ？

一之介 イカは一パイ。

二郎 ええ、いっぱい捕れますよ。

一之介 イカは一パイ、二ハイと数える。

二郎 え？あ、そうなんスカ？

一之介 スルメは一連、二連。

二郎 へー、知らなかったねえ。さすが大学の先生だね、イカに詳しいねえ。

一之介 英米文学だ。

二郎 じゃ、貿易摩擦なんかの？

一之介 それは日米だ。

二郎 つりあいが肝心ですよねえ。

一之介 それはヤジロベエ。

二郎 は？

一之介 J o k e 。

二郎 あ・・・ははは（空笑い）

イカの鳴き声。

二郎 あらあー、先生。イカが笑ってます。イカにまでウケちゃって、ホントにもう、ねえ・・・ま、イツカなんて。でへへへへ。

一之介 （ウケない）ところで・・・。

二郎 はい？

一之介 この家は、イカホテルと呼ばれてるそうだが・・・。

二郎 ・・らしいですね。

一之介 見たところでは、宿泊施設があるとも思えないけど。

二郎 (あつさりと) ないスよ。

一之介 ……だよね。

二郎 はい。

一之介 なんでなんだろうね。

二郎 はい？

一之介 だから…その、イカホテル。

二郎 さあねえ、私は知りません、ぜんっぜん。

一之介 その…おばあさんだけど。

二郎 え？

一之介 ほら、入院してるっていう…。

二郎 あ…ああ。

一之介 どの…病院に入院してるのかな？

二郎 はあ？

一之介 あ、いや、売り主さんということになるわけでしょう。一応、お見舞いっ  
ていうか…。

二郎 そんなご心配は無用ですよ。事務的なことは、ぜんぶうちの方でやります  
し。

一之介 ……そうなんだけどね。

二郎 何か？

一之介 うん…そうね、そうだよね。

二郎 はい…。

一之介、柱のキズを撫でたりしている。

二郎、埃を手ですくって「ふッ」

一之介・二郎 （同時に）それで。

二郎 あ、どうぞ。

一之介 失礼した。その・・少し、休んでもいいかな。

二郎 休むって・・ここですか？

一之介 君は会社にもどってくれてかまわない。鍵は・・そうだな、帰りに届けるよ。亀田不動産だったよね、烏賊浜駅前の。

二郎 ええ、そうすけど。でも、休まれるんでしたら、会社の方で。車でお送りしますから。

一之介 いや・・ここでいい。

二郎 でも、駅までだいぶありますよ。

一之介 バスが通っていただろう。

二郎 一時間に一本ですよ。バス停までもけっこうあるし。

一之介 ぶらぶら歩いていくよ。

二郎 でもねえ、ここじゃ、お茶ひとつ入れられませんし。

一之介 別にいい。

二郎 自動販売機も近くにやないし。

一之介 喉かわいてないから。

二郎 そうですかあ。

一之介 ああ。

二郎 で、こちらの物件ですが・・その・・どうなさいます？

一之介 え？

二郎 もし、お気にめしたんでしたら。

一之介 ああ、気に入ったよ。

二郎 あ、それはどうも、ありがとうございます。じゃ、契約の方をひとつ。

之介 ああ。後で会社の方でね。

二郎 はあ・・・。

一之介 なにか？

二郎 もしナンでしたら、先に、ご契約だけでもと思ひまして。

一之介 急ぐの？

二郎 というわけでもないんですが・・・。

一之介 (むっとして) 後で行くって言うてるだろう。それとも何？ここにいちやまずいの？わたくしは、客なんだよ。

二郎 いえ、そんなことは。

一之介 なら、さっさと帰りましたまえ。

二郎 そうまでおっしゃるんですたら・・・行きますけど・・・あの、ほんとにバス  
ないですよ。

一之介 しつこいね、君は。

二郎 じゃ・・・お先に、失礼します。

一之介 ああ。

二郎、首をかしげながら、出ていく。

二郎の姿が見えなくなると、一之介、木馬にかけよる。

そして・・・懐かしむように撫ではじめる。

一之介 やっぱり、まだあった・・・。

ドア、開く。ぎよつとする一之介。

一之介　な、なんだよ?!

二郎　あのお・・・会社、六時までですので、それまでには・・・。

一之介　わかったよッ。

二郎　よろしく。

二郎、ニツとする。

茫然とする一之介。

ドア、閉まる。

一之介、それを確かめて、再び、木馬のところに。

そつと跨ぐ。

二郎　（窓からにゆうつと顔を出し）あのお。

一之介　（つんのめる）な、なんなんだよッ。

二郎　窓、閉めてきてくださいね。

一之介　わかってるよッ。

二郎　そんじゃ、ごゆつくり（ニツとして消える）

憤然とする一之介。

木馬に目がいくが、外が気になる。

ト、その時、ふと、あるひらめきを感じる一之介。

窓を振り返り、木馬に目をやり・・・窓まで行き外を見、再び、木馬のところに戻ってくるが・・・。

一之介 ……まさか・ね（またもや窓のところへ行き、乗り出して外を覗く）

二郎、上手ドアから、ひよっこり姿を現し ……

二郎 お客さん。

一之介、窓枠に頭をぶつける。

一之介 きみツ、いったいどこからツ。

二郎 裏口が開いてたもんで、思い出して。

一之介 （苛々して）なにをツ？

二郎 （鍵を見せて）これ。

一之介 （不機嫌に）ああ、鍵か（邪険に受け取る）

二郎 じゃ、よろしく（ト、正面ドアの方へ）

一之介 （憤然として髪を整えているが、不意に）君。

二郎 は？

一之介 つかぬことを言うようだがね。

二郎 はい？

一之介 ……これに…跨がってみてくれないか？

二郎 はあ？

一之介 （木馬を指す）

二郎 この…木馬に、ですか？

一之介 （頷く）

二郎 いや、私はいいスから。

一之介 跨がってくれって言ってるんだよ。

二郎 いえ、お客さんどうぞ。もう覗いたりしませんから、思う存分、遊んでください。

一之介 跨がれ！

二郎 (ぎよっとする)

二郎 ……。お客さん、帰りましょ。ね(ト、手をとり)

一之介 な、なにをするんだよ。

二郎 気にしないで、ね。誰だって、時には子供みたいな気分にはいたりたくなるもんです。異常とかそういうことではないです。大丈夫、人にはいいませんから。

一之介 (手をふりはらう)

二郎 お客さん……。

一之介 (頑なに木馬を指さす)

二郎 ……従わざるをえなくなる。

二郎 こう……スか？

一之介、眺める。

二郎 何のマネすか？私は別にお客さんみたいな趣味は……。

一之介 (揺すれという動作)

二郎 は？……(仕方なく木馬を揺すり)……どうどうどう……。

一之介、見てる。

二郎

……。♪ローレンローレンローレン……。(一之介をうかがう)

一之介、記憶を辿るかのような不気味な目つき。

二郎

(やや怖くなって小声で)……。♪ローハイ……

その時、ドアのノブ、がちやりと音をたてる。

同時に見るふたり。

ドア……そおっと開き、隆が顔を覗かせる。

隆

!?

二郎

(木馬から立ち上がった) あ、いや、あの、その、これは、その、この人が……。

隆

こちら、小泉とわさん……のお宅ですよね。

二郎

え？

隆

失礼します。

隆、入ってきて、習慣のように警察手帳を見せる。

一之介・二郎

警察?!

隆

あ、(あわててポケットにしまい) つい習慣で。



一之介 小泉とわさんが何か？

隆 いえいえ、伺ったのはそういうことではなくて・・・(二郎を見て、一之介を見て) 小泉さんは・・・

一之介 は？

二郎 私は、不動産屋ですが。

隆 不動産屋？

二郎 ええ。こちらは、この家をご覧になりにもえたんです。

隆 ……あなた、ここをお買いに？

一之介 まだ契約はすませておりませんが。それがなにか？

隆 失礼ですが、小泉さんとはどういう・・・

一之介 は？

二郎 (懐から名刺を出して) こちらさん、大学の先生さんです。さきほど、会社でいただきました(一之介に)ね。

隆 光和学園大学文学部助教授、西貝一之介。

一之介 (不機嫌になって) 別にあやしいものではないつもりですがね。

隆 あ、いや、そういう・・・

二郎 (名刺を取り出し) ちなみに、私はこういうもんです。決して、あやしいものではないです。さつきはちよつとナニがナニして、いろいろナニだったもんで。

隆 (二郎の名刺を見て) 亀田不動産烏賊浜支店支店長、亀田二郎。

二郎 御用のむきには、ひとつよろしく。

一之介 あなたこそ、職務でないとすれば、いったいどこのどちらさまで、どういうご用件でいらしたんでしょうねッ、けいじさん。

隆 あ、失礼しました(名刺を二枚出して、ふたりに渡し) 長岡と申します。

二郎 警視庁刑事部鑑識課、長岡・

一之介 アレックス?!

隆 あ、それはうちの犬でした。

一之介・二郎 犬!?

隆 (名刺を探しながら) ええ、警察犬なんです。優秀な犬でしてねえ。去年、埼玉で起こった連続殺人事件、ご記憶ですか?あの犯人逮捕にアレックスが大活躍しましてね。その外にもいろいろ手柄をたててまして(名刺を出し)あ。ありました。どうも失礼いたしました(ト、ふたりに渡す)

一之介 埼玉県警刑事部第二課、長岡隆・。

二郎 ・・というと、やっぱり殺人なんかの?

一之介 それは、一課でしょう。

隆 そうです。第二課というのは、選挙違反などを取り締まっています。いやあ、最近のは手がこんでいまして、検挙率がいまいちで。

一之介 で、愛犬の方は、殺人犯逮捕に大手柄と。

隆 は。多少、負い目は感じておりますが。

二郎 へえ、警察犬ってのは、鑑識課なんですか。こりゃ、珍しいものをいただくいちやったな。息子に見せてやろう。

隆 喜んでいただけで嬉しいです。なんなら、もう二、三枚。・。(ト、出す)

二郎 そうですか。どーも、どーも。

隆 先生も(ト出す)

一之介 わたくしは結構。

隆 はあ・。

二郎 じゃ、せっかくですから、私がいただいちゃおかな。

隆 あ、どーぞどーぞ、何枚でも。

二郎  
すいませんねえ、いただくばかりで（ト、名刺入れに名刺をしまいながら）あ、これ、駅前のカラオケスナックですけど、よろしかったら。

隆  
いやあ、これは恐縮です。スナックも経営なさってるんですか？

二郎  
いえいえ、ただの馴染み。ママをね、ちよつと知ってるもんで。

隆  
あ、なるほど。

二郎  
えへへ。

隆  
あはは。

呆れ顔で見ていた一之介、名刺を背広の内ポケットにしまう。その時、ちらつと見えた水色の封筒に、隆、目をとめ、はっとなる。

隆  
（一之介の内ポケットの位置から目をはなさない）

隆  
あ・・いや（目をそらす）

一之介  
？

一之介、内ポケットに目を落とす。

隆  
（窓の外を見て）いいところですねえ。海が一望に見わたせる・・。

二郎  
ええ、のどかなだけが取り柄ですがね。こちらさんもね、静かでいいっておっしゃって（一之介に）ねえ。

二郎、椅子におちついてしまう。

一之介、ジロツと見る。

隆も、ベンチに座る。

一之介 (ふたりを見回す)

二郎 どうですか、長岡さんもおひとつ。

隆 え？

二郎 浜の向こうっ側になるんですが、ニュータウンが開発されましたね。

隆 いやあ、刑事の安月給ではとてもとても。

二郎 またまた。アレックスが稼いでくれてるんじゃないんですかあ？

隆 タレント犬じゃないんですから。

二郎 タレント犬といやあ、リュウ。泣けましたねえ、家なき子。

隆 あなたもですか。

二郎 ええ。あんな雑種がいい金とってるんだと思うと、しみじみ我が身が情けなくなりましたよ。

隆 ああ、そういう・・・。

二郎 ね、とらばーゆするって訳にはいかないんですか？ 刑事ものだったら、地でいけるじゃないですか。

隆 アレックスがですか？ いやあ、タレント性はないヤツですから。いたって無骨ものでして。

二郎 またまた。警察犬っていうと、アレですか、オオカミみたいなやつ。

隆 (得意気に) ジャーマン・シェパード。

二郎 おッ、業界用語が出ましたねッ。

隆 は？

一之介 (咳払い)

二郎・隆 (は・・・とする)

二郎、ジャーマン、マージャンと呟きながら反省している。

一之介 長岡さん。

隆 あ、はい。

一之介 あなた・・・お住まいを探しにみえたのではない・・・とすると・・・

隆 はあ・・・その・・・ちよつと・・・小泉とわさんに・・・

二郎 えッ？

一之介 (ジロツと睨んで) 君は、いつ会社に帰るのかね？

二郎 あ・・・そうですね・・・そうでした。

一之介 そうだよ。

二郎 じゃ、私はその・・・

二郎、立ち上がって、ドアの方へ行く。

が、ふたりの様子が気になるふうに、窓のあたりでうろろうろしている。

一之介、二郎を見る。

二郎、一之介の視線を感じて。

二郎 窓・・・

一之介 ちゃんと閉めるよ。

隆 ……

一之介 (隆に) どういうご用件で、小泉とわさんに？

二郎、窓から身をのりだすようにして外を見ているが、耳はあきらかにふたりの方に。

隆 西貝さん・・・でしたよね。

一之介 はい。

隆 ……。もしかすると、あなたも、小泉とわさんに会いにみえたのではないですか？

一之介 え？

隆 先程、内ポケットに水色の封筒が見えたものですから。

二郎、振り向きざまに窓枠に頭をぶつける。

その音に、一之介・隆、二郎を見る。

二郎、視線をそらす・・・が、すぐに横目で、ふたりの方を伺う。

隆 (ポケットから封筒を出し) ひよっとすると、これと同じものではと。

一之介 え！？

二郎 !

隆 ……同じものですね。

一之介 (内ポケットを押さえ) どうしてあなたがそれを・・・。

隆 (一之介の方に封筒の裏書きを見せて) 小泉とわさんからです。

一之介 ……。

隆 (一之介の内ポケットに目をおとし) 小泉とわさんからですね？

二郎、ふたりから離れ、ズボンの尻ポケットに手を入れる。

隆 (二郎は見ずに) 亀田さん。

二郎 は、はいッ。

隆 あなたもお持ちなんですか。

一之介 ええッ!? (二郎を見る)

二郎 い、いつ見たんですか? 尻ポケットがやぶけてたなんてことは・・・(ト、見る)

隆 さっき、窓に頭ぶつけられたでしょ。

二郎 え? あの時、見えたんですか?

隆 (苦笑して) さしつかえなかったら、中を見せていただけませんか。

二郎、ちよつとためらうが・・・封筒を隆に渡す。

一之介 ……。

隆 私のをご覧になりますか、西貝さん。

一之介 (黙って受け取る)

二郎 (自分だけ、手紙を持っていないので、一之介を見る)

一之介 (渋々、二郎に自分の手紙を渡す)

三人、封筒から便箋を出し読む。

一之介 “バスをおりて、海のおいがしたら・・・”

隆 “イカホテルはどこですかと聞いてください・・・”

二郎 “おかあさんとこにきて・・・ええ?! おかあさんって、あんたのッ?”

三人、それぞれの便箋を見比べる。

隆 おなじ文面・・・ですネ・・・。

二郎 じゃ・・・その・・・小泉とわってのは、俺らの・・・。

一之介 じゃ・・・私たち三人は・・・。

顔を見合わせる三人・・・が、気まづく目をそらし、三方に散る。

二郎 ・・・・まいったね。死んだはずじゃなかったのかよ・・・。

一之介 え？死んだ？

二郎 小泉とわですよ。俺、そう聞いてましたもん。

一之介 しかし、この手紙は・・・。

二郎 だからさ、生きてるんでしょ、まだ。まあ、そんなのどっちだっていいけど、兄弟がいたなんてね。今の今まで知らなかったよ。

隆 まさに、晴天のヘキレキですね。

二郎 ・・・・二カ月位前かな。浜の古い家が売りに出たつてんで来てみたんすよ。

そしたら、俺が四つまで住んでた家じゃないですか。

隆 あなた、ここに？

二郎 そうです。とつくのとうに誰か別の人の家になってると思ったら、持ち主は今でも、小泉とわ。死んだつて聞かされてた、俺のオフクロじゃねえの。それで今は入院してるとつて言う。

一之介 会いに行ったのか?!

二郎 行きませんよ。見舞いになんか誰が行くもんかよ。俺を捨てた奴なんかのさ。



隆 捨てたって……

二郎 そうだよ。捨てられちゃったのよ、俺、ガキン時にき。小泉とわにねッ。

隆 あの……あなた、おいくつですか？

二郎 え？俺？

隆 (頷く)

二郎 今年で四十。

隆 じゃ、兄さん……ですね。私は三十五ですが、私も母は死んだと聞いていました。

二郎 でしょ？へえ、じゃひよつとして、あんたも捨てられたんだ。いくつん時？いくつまで、あの女と一緒にいたんですか？

隆 私は……その……

二郎 西貝さんは？あ、先生の歳、聞いてなかったな。まさか弟じゃないスよね。

一之介 ……四十五歳だ。

二郎 やつぱり、いっとう上のアニキだ。いっとう最初に捨てられたクチですね。しかし、ひでえよなあ。子供、三人も作ってたなんてねえ。信じられない女じゃないですか、ねえ。それで、三人とも捨てちゃって。

一之介 (思わず) 捨てられてなんかいないッ。

二郎・隆 (一之介の剣幕にひるむ)

一之介 ……わたくしは、捨てられたわけではない。

二郎 ……はあ、そりゃ、どうも……

隆 会いに来てほしいというのは……やつぱり、病院に……

二郎 じゃないんですか。ま、俺は遠慮しますが、おふたりが行くつていうのを止めはしませんよ。ああ、病院はわかると思いますよ。会社に電話して聞けば、たぶん連絡先が書いてあるはずだから。聞きましょうか？(ト、木

馬に跨がり、携帯電話をダイヤルしはじめる)

一之介 やっぱり・・・君か・・・

二郎 は？

一之介 ・・・・わたくしと五歳違いの弟・・・君がそうなら、やっぱり、あれは君だったんだ・・・

二郎・隆 ？

一之介 (二郎に) この木馬に・・・この木馬にのっていたのは、君だッ。

二郎 なんだよ・・・どきますよ、どけばいいんでしょ。

一之介 ごまかすなッ。

二郎 何言ってるんです？さつきは乗れって言ったくせに。

一之介 君が、わたくしのすぐ下の弟と知って、今、わたくしは、確固たる確信を得たぞ。

二郎 はあ？

隆 あの・・・どうしたんですか？

二郎 訳わかんないスよ。

一之介 母と別れて一年後、わたくしが五歳の夏、この烏賊浜を訪れた時に、わたくしにことわりもなく、この木馬に跨がっていた赤ん坊はきみだッ。その顔に見覚えがあるッ。

二郎 はああ？

一之介 この木馬は、父がわたくしに買ってくれたメイドインUSAの高級品だ。父はわたくしの誕生を心から待ち望んでいたんだ。けれど、わたくしが生まれる前の年のクリスマスに、この木馬を買って、ここに来る途中、交通事故で亡くなってしまった・・・だから、これは、父のかたみ・・・大事な大事な父の・・・。そ、その木馬にきみはッ。

二郎　　ちよ、ちよっと待っててくださいよ。なんの話よ。さっぱりわかんねえよ。

一之介　知らないと言わせないぞッ。これに、わたくし以外の赤ん坊がッ、体のわりにいやに顔の大きい、みっともない赤ん坊がッ。

二郎　　え？

一之介　まわりもしない口でどうどうどう。

二郎　　なに？

一之介　その大きな顔が証拠だッ。

二郎　　・・なんだと？このお・・だまっつてりやいい気になりやがって、人がいっとう気にしてることをッ！（一之介に襲いかかる）

一之介　なにをするんだッ。

隆　　ちよ、ちよっとッ（ト、止める）

一之介　乱暴はよしたまえッ。

隆　　なめやがってッ、この野郎ッ。

ト、その時、ドアが開く。

スーパ－の袋をさげた小泉正太である。

正太　　あれえ、もう兄弟喧嘩ですかあ？

三人　　え？

正太　　（入って来て、袋から缶ビールやジュースを出し、渡しながら）いいな  
いいな。喧嘩できる兄弟がいるって最高ですよ。今、お寿司来ますか  
ら。

二郎　　・・なんなんだ、このノーテンキ野郎は・・。

正太

(三人を見渡し、笑顔で) はじめまして、小泉正太っていいです。よろしく、兄さん!

三人

にいさん?!

イカの鳴き声。

音楽。暗転。

(3)

明かり入ると、前と同じイカホテルの土間。

中央に置かれたダンボールの上には、大きな寿司桶がのせられてある。

それを囲んで座り、寿司を食べている四人。

寿司桶の中には、数個の寿司が残っている。

二郎

食った食った(ト、割り箸の一本を桶の中に投げ捨て、もう一本で、歯をシイシイやりながら缶ビールを飲む)

一之介、二郎をジロリと見て、彼の箸を汚そうによけ、箸でガリをひとつまみ取り、手を受け皿のようにして、上品に食べる。

隆、箸をおいて、缶ウーロン茶を飲み、煙草に火をつけて立ち上がる。

正太 イクラ残ってますよ。(二郎に) 食べないんですか？

二郎 腹いっぱい。

正太 (隆に) いいんですか？

隆 ウニ食ったから(灰皿を探しているが、ないので、缶のウーロン茶を飲み干し、それを灰皿がわりにする)

正太 (一之介に) ウニ、食べました？

一之介 (首を横にふって) ジンマシン出るから。

正太 (箸でイクラを指し) これは？

一之介 (首を横にふって) それ、さっき、こちら(二郎)が、迷い箸したやつだから。  
から。

二郎 (ムツとする)

正太 じゃ、いただきちゃいます。

隆 (正太の脇に立ち) 君だけが・

正太 (モグモグしながら) はい？

隆 小泉姓なんだね。

正太 (軽く) はい、とうさんの籍に入れてもらえなくって。ま、いわゆる私生児ってやつですよ。あ、鉄火巻きもいいですかあ？(食べる)でもね、名前の方は、とうさんから貰ったんですよ。とうさんは、正研(シヨウケン)っていうんですけどね、正しいに、研究の研の字。で、僕は、その正しいをもらっ

正太。正しく太いって書くんです。

隆 小泉正太、三十歳ね・・・。

正太 あれえ、どうして僕の歳、知ってるのかな。

隆 四十五、四十、三十五とくれば、まあ、三十じゃないかってさ。

正太 へえ、さすが刑事さんですね。名推理。

一之介 それくらい、刑事じゃなくなつたつて推理できるんじゃないですか（箸を箸入れに戻し、ごちそうさまをする）

正太 あれ、もう食べないんですか。小食だなあ、皆さん（ト、食べる）

二郎 で、なんだつて、小泉とわは今頃になつて俺たちを呼び集めたんだ？えッ？聞かせてもらおうじゃないの。

一之介 食べてからでいいじゃないか。行儀悪いよ（正太に）ねえ。

正太 （モグモグしながら）はい（ト、食べ続ける）

二郎、煙草をくわえ、火を探す。

正太 （食べながら、マッチを差し出し）どうぞ。

二郎 （受取り、火をつけて返す）

正太 あ、名刺がわりにどうぞ。

二郎 え？（ト、マッチを見て）ジャック・スポット・へえ、御徒町つてえと、上野のそばだろ。スナックかなんか？

正太 ホストクラブです。

三人 へ・・・？

二郎 ・・勤めてんの？

正太 はい。

二郎 ホスト・・・じゃないよね？

正太 ホストですよ。

二郎 ……うそだろ。

正太 なんでそんなこと言うのかわかんないなあ（食べてる）

二郎 だってあんた、ホストつてのは、もつとこう…（隆に）ねえ？

隆 さあ、行ったことないからわからないけど（一之介に）どうでしょうね。

一之介 ま…まあ…なんというか…ご婦人の方には、可愛らしい感じがするのかも…

二郎 そんな、あんた。する？（正太を指す）

一之介 いや、だから、わたくしではなくだね、ご婦人方が。

二郎 可愛いのがいいんなら、動物園にでも行きやいいじゃないの。パンダでもラッコでも、いくらでもいるよ。

正太 パンダやラッコがダンス踊れますか。

二郎 ええッ、じゃ、あんた、踊るの？チークとかあ？

正太 そうですよ。

二郎 チークなんて、顔、こんなに近づけるんだろ？やだねえ、俺は。

一之介 君は嫌でも、ご婦人はいいんでしょ、きっと。

二郎 そうかねえ（隆に）わかります？刑事さん。俺は、まるでわかんねえな、そのご婦人の趣味つての。だって、俺、ホストつてのは中条きよしみみたいなのだと思つてたもん。

正太 古いんですよ、そういうのは、もう。

二郎 そうなの？それにしてもさあ…。いやあ、なーんか、ガラガラと崩れるものを感じるねえ。で、小泉とわは、知ってるのか？

正太 知ってるって何をですか？

二郎 あんたの商売。

正太 勿論ですよ。僕、盆暮れには、ここに帰ってきてますし、言っちゃナンで

すけど、仕送りだっしててるんですよ。

隆　へえ、親孝行なんだね。

二郎　ま、当然といやあ当然だけだな。

一之介　そうかな。君は、しそうにもないけど。

二郎　（ムツとする）

正太　（食べ終えて）ごちそうさまでしたー（桶をドア近くに片づける）

一之介　で、ひとりいくら？正太くん。

正太　あ、いや、いいスよ。

一之介　駄目だよ。こういうことはきちんとしなくちゃ。ね、いくら？

正太　さあ、適当に四人前作ってくれってたのんだから。

一之介　（考えて）ウニとイクラが入ってたよね。二千円くらいかな。

二郎　二千円はしねえだろう。このあたりの寿司屋で二千円ったら、トロにアワビに・・・。

一之介　二千円に違いないッ。

隆　（出して、正太に）二千円。

正太　ホントいいスから。

一之介　（財布を覗いて）だめだめ・・・あ、細かいのでもいいかな。小銭入れが重くってね。（五百円玉）いち、にんさ、と（百円玉）いち、に、さん、

し、ご・・・と。（隆のも徴収し）はい、四千元ね。

二郎　（五千円札を出して）つり。

一之介　（すばやく二郎に細かいのを渡し）はい、三千円のおつりね（千円札と五千円を正太に渡して）確かに、六千円、渡しましたよ。

二郎　（ムツとする）

一之介　で、かあさんのことだけど・・・入院してるとって？



正太 ええ、そうです。

隆 手紙は病院から？

正太 ええ、僕が出したんです。

一之介 え？君が？

正太 あ、書いたのはかあさんですよ。で、僕、投函してくれて頼まれて。僕も、その時、初めて聞いたんですよ、兄さんがいるってこと。もう、ドッヒャーって感じで。しませんでした？ドッヒャーって。

三人 ……したよ。

正太 ですよ。わかるわかるわかる……。

三人 ……。

二郎 ……もったいぶってないか、あんた。

正太 いえいえ、そんな。

一之介 君は、いくつまで、かあさんと一緒に住んでいたの？

正太 ここに住んでいたのは十八までです。十八ん時、東京行っちゃったから。あ、僕ね、デザイナー学校出てるんです。

二郎 じゃ、最初っからホストじゃなかったんだ、やっぱり。

正太 ええ、グラフィックデザイナー志望だったんです。でもねえ、就職がむずかしくって。才能はあったんだけどなあ……。僕ね、小学校、中学、高校と、県の絵画コンクールに入選したんですよ。小学校の時が、春の交通安全のポスターで、中学が、愛鳥週間でしょ、で、高校が、国際婦人デーのポスター……。

一之介 へえ、ポスターがホストになっちゃったわけね。

正太 うまいッ。

一之介 いやいや（ニコニコ）

正太 あ。あのポスター、まだ、どっかにしまつてあるんじゃないかな（立ち上がり、奥の部屋の方など覗き）もう、片付けちゃったかなあ・・・。

二郎 いいよ、そんなもん。

隆 小泉とわさんの話を聞かせてくれないかな。

一之介 かあさんの病気だけど・・・。どこが悪いの？

正太 心臓です。五、六年くらい前からおかしかつたんですけど。まあ、老化っていうのかな。

隆 老化って・・・いくつなんだい？

正太 え？かあさんの歳も知らないんですかあ？

三人 ……知らない・・・。

正太 ドッヒャラーツ。

二郎 （苛々して）なんなんだよツ、そのラーっつーのはツ。

正太 ドヒャーの比較級。へー、そつかあ。六十六ですよ。

一之介 老化ってほどの歳でもないじゃないか。

正太 苦労したから、かあさんは。

三人 ……。

正太 そりやあもう、山あり谷あり谷底ありの、ぐっちゃぐちや。ねえ。

隆 ねえって我々は、なんにも・・・

正太 あ、そーでしたねー。なーんにも知らないんだ、かあさんのこと。

二郎 ……お前、結構、いやみなヤツな。

一之介 戻ってこられそうもないから、ここを売りに出したっていうのは？

正太 病院の方もなにかとお金かかるし、いっそ売っちゃって、入院費にまわした方がいいんじゃないかと思って。

一之介 かあさんがそう言ったの？

正太 いえ、僕が言ったんです。

一之介 病気・・重いのか？

正太 ええ・・いつ発作がおこってもおかしくないって、お医者さんにも言われちゃってるんですよ。でもね、僕が、ここを売ろうって言ったらね、そんなことしたら、いっちゃんたちが戻ってこられなくなるじゃないのって。

隆 いっちゃん？

一之介 わたくしのことだよ。かあさん、そう言ったのね、いっちゃんがって。

正太 たち、です。ジロちゃんはどこへ帰ればいいの？隆が戻ってくるかもしれないのって。

一之介 ・・・・。

正太 それ聞いた時、僕、あれえ、かあさんボケたかなって思ったんですよ。だって兄さんがいるなんて考えてもみなかったし。けど、かあさんが手紙を書いて、僕に投函してくれてって言って。じゃ、これはボケてんじゃないかってマジなんだって。マジで兄弟がいるんだって。

二郎 けど、よくわかったよな、俺たちの居所。

正太 あ、それは、かあさん、ずっとリサーチしてたみたいですよ。

隆 それで・・会いたがっているんだね？

正太 ええ。かあさん、もう自分があんまり長くないってこと、わかってるみたいなんです。だから、ここに・・もし、ここに三人が来てくれたら、しようちちゃん、きっと連れてきてちょうだいねって。で、そういうことなら、僕としても会わせてあげたいなって。

三人 ・・・・。

正太 あ、いや、かあさんの面倒をみてくれとか、そんなことを言ってるんじゃないですよ。それは僕が責任もちます。万が一、退院できたとしても、僕

が東京に引き取って一緒に暮らすか、とにかく皆さんにご迷惑は・・・。

一之介

そんな、君ひとりが責任を負うことはないんじゃないの。四人も息子がいるんだから。そうでしょ。

二郎

・・・まあ・・・ね、一応はそうだけど・・・(ハッとして)あ、この人ッ、ね、正太くん。この人この家を買うんだよ。そうそう、そうだったよ。正太くん、小泉とわが退院しても、君が面倒をみる必要はないよ。この人とここで暮らせばいいんだから。この人、長男だし、独身だから、嫁姑の心配もないし。うん、それがいい。

正太

この家を買うって・・・ホントですか、西貝さん。

一之介

まあ・・・そのつもりだけど。

正太

いやあ、それは、かあさん喜ぶなあ。本当は、かあさん、ここを手放したくないんですよ。かあさんに見れば、兄さんたちの思い出がまつてる家ですもん。だから、ここが人手に渡ってしまう前に、皆さんに一度でいいから集まってもらいたかったらしくて・・・。いやあ、西貝さんが、ここで暮らしてくれるなんて。

二郎

正太くん、君には将来があるんだもの。嫁さんだってもらわなくっちゃならないんじゃない、君は。でしょ？

正太

ええ・・・いるにはいるんですよ。

二郎

ほーらほらほら、そうよねえ。長岡さんだって俺だってき、家庭があるもの。普通そうよ。その点、この人、そういう心配、ぜんっぜんナシだもの。思いもよらなかったスよお。西貝さん、ありがとうございます。僕からも、お礼をいいます。

二郎

(膝を正して)西貝のにいさん！

一之介

にいさん?!

二郎 本日は誠にありがとうございました。こら、隆、お前もお礼をいわんか。

隆 は・・・はあ・・・(ト、ひざまづく)

二郎 三人、そろったところで・・・誠に誠に。

三人 ありがとうございます！

二郎 いやあ、よかったよかった。これで一件落着だねえ。じゃ、先生、あとのこととはひとつ、よろしく頼みますよ。先生に、ぜーんぶ任せますから。さてと(時計を見て) ちょっと早いけど、どうです、四人で、一杯やりにいきませんか。

隆 は？

二郎 こんなところで、ツラつきあわせててもしょうがないじゃないですか。

一之介 あのお・・・きみね・・・

二郎 こうやって会ったのも、なにかの縁ですよ。これからもよろしくってことで、どうです？飯でも一緒に。あー、寿司くっちゃったかー。惜しいことしたなあ、いい店、あったんだけどなー。じゃまあ、かなり早いですが、カラオケってことで。馴染みのスナックがありますから、開けさせますよ。正太くん、君、レパトリー、広いんじゃないのお？何歌うの？ドリカム？俺はね、ドリフ。

正太 あのお・・・

一之介 べつらべらべらとくだらないことをッ。

正太 亀田さん、かあさんに会ってもらってから・・・それからつきあいますよ、カラオケ。

隆 やっぱり、まず小泉とわさんに会わないとね。せつかく来たんだから。

一之介 そうだよ。いったい君は、ここに何しに来たんだよッ。

二郎 俺は、仕事で来たんですよ。あんたが、ここを買いたいっていうから案内

してきただけだよ。そしたら何よ、アニキ？聞いてねーよ、そんなの。

隆

正太くん以外は皆な、そうですよ。

二郎

手紙だって無視したね、俺は。

隆

でも、持っていましたよね。

二郎

そりゃ……。たまたま……。入ってただけだよ。とにかく、俺は病院になんかいかねえよ。俺のこと捨てたやつの見舞いなんてまっぴらだね。

一之介

捨てた捨てたって、君は、頭っからそう決めつけているが、君を手放してしまったのには、それ相応の理由があったからかもしれないじゃないか。手放したくて手放したんじゃないかもしれないじゃないか。

二郎

そうかねえ。

一之介

現に君は、四歳までここで、かあさんと暮らしていたんだろう。さつきそう言ってたよね。だったら、可愛がられて、幸せだった思い出……

二郎

幸せなんかじゃねえよッ。

三人

……。

二郎

……。ああ、確かに、俺は、ガキの頃、ここに住んでましたよ。あんたにことわりもなく、その木馬にのっかったこともあったでしょうよ。まっさか、四十年後に文句言われるなんて思いもせずに、でかい面してたんでしょよ。けど、覚えてねえよ、そんなこと。ガキだもん、よだれたらしてる赤ん坊だもん……。俺が覚えているのは、その後の……。物心ついてからのほんの一年くらいのこと……。オヤジやオフクロのことで、近所の悪ガキにいじめられたことだけだよ……。

隆

いじめられた？

二郎

お前のオフクロは淫売だって、男を次々に引きずり込むんだって……。おれ、そう言われたよ。この人（一之介）のオヤジが最初……。かどうから知らない

いけどき、とにかくその次が、俺のオヤジ。狭い村のことだもんな、テテナシゴふたりも産みやあ、立派にインバイよ。

一之介 君の父親が、どういう人かは知らないが、わたくしの父とは、そういう、引きずり込むとか、引きずり込まれるなどというような関係ではなかったと信じている。

二郎 ま、信じるのは勝手だけどな。

隆 西貝さんのおとうさんは、あなたが生まれる前に亡くなったんじゃないんですか？

一之介 そうですよ。

隆 見たこともない父親を・・・信じるんですか？

一之介 いけませんか。

隆 いえ・・・。

一之介 父と小泉とわさんは不倫の関係でした。けれど、それは、父に既に妻がいたからであって・・・

二郎 女房がいなけりや不倫じゃねえよ。ただの恋愛関係じゃねえか。なに、わかわかんねえこと言ってるんだ、この先生はよッ。

一之介 わたくしの話の真意が理解できないようだね。わたくしが言いたいのは、もし仮に、父が独身であったなら、父は母をきちんと籍に入れ、わたくしと三人、何不自由なく幸せに暮らしただろうと言うことです。さらに言いたいのは、既婚者であつても、もし、わたくしが生まれる前に亡くなつたりしなかつたならば、いずれは正妻と離婚をして、母を、小泉とわさんを、正式な妻としてむかえたに違いないということです。

二郎 そんな“もし、もし”が起こつてたら、俺たちや、今、ここにいませんよ。

そういうことになりませんか？

一之介　ですから、それは、運命のいたずら・・・

二郎　あら、じゃ、俺は運命のいたずらなの？あんた以外の俺たちって、みーんな運命のいたずらっ子？

正太　いたずらっ子かもしれないません。

三人　え？

正太　僕、よく、かあさんに言われましたから。もおッ、このいたずら坊やって。

三人　・・・。

二郎　て、てめえは、人の話をぜんぜん聞いてないッ（首をしめる）

隆　か、亀田さんッ（止める）

正太　あー、怖かった・・・亀田さんのおとうさんて前科者なんだもん・・・

一之介・隆　え！？

一之介、正太、隆にしがみつく。

一之介　どおりで。さっきわたくしも襲われたんですよ。血です、血。

二郎　なに離れてンだよッ。

正太　わッ、スゴンでますよ。やだなあ。

隆、ネクタイを締め直し、二郎の隣りに座る。

隆　ま。（ト、煙草をすすめる）

二郎　？・・・何やってんだよッ。俺はなんにもしてねえよ。少年院のお世話にもなっってねえよ。二、三度、保護処分うけたことあるっただけッ！・・・あ。

正太　（とんできて）はきましたね。やっぱ、これ（煙草をすすめる仕種）は効



きますね、これは。

隆 パターンだけど。

正太 さすが、デカ長ッ。

隆 デカ長はやめてよ。まだ、ヒラなんだから。

正太 「またまたア」隆 「そのうちなるけどサア。なーんちやって」などと  
バカを言い合って笑ってる。

一之介、椅子を離して座り、ちらちらと二郎を見る。

二郎 なにもしねえよッ。(正太と隆に) おめえらも座れッ。

二人、座る。

二郎 (三人を見回して)・・・こわがるんじゃない。

隆 こわくありませんよ、私は。

一之介 そうそう。こわくないです、刑事さんもいることだし。

正太 一応、更生なさってはいるみたいだし。

二郎 (頷き) よし。で・・・なんの話だっけな。

一之介 前科者・・・

隆 (同時に) 少年院・・・

正太 保護処分・・・

二郎 (立ち上がり) 俺、帰るわ。

正太 (止めて) 言いませんから、もう言いませんから。差別しませんから。ね、  
ね(ト、座らせる)

隆 あの・・・ちよつといいですか。

一之介 なんですか？

隆 実は、ずっと気になってたんですが、皆さんは、年月の長短はあるにせよ、それぞれ、小泉とわさんと一緒に暮らした経験があるわけですよね。

一之介 それがなにか？

隆 私だけは、まるつきり・・・思い出というか、そういうのもないわけで・・・。

二郎 だから？

隆 ちよつと不公平だと思いませんか？

二郎 ぜんぜん。

正太 だって仕方ありませんよ。長岡さんは、生まれてすぐにおとうさんに引き取られちゃったんですから。

隆 そうなんだよね。父からもそう聞いているんだけど・・・でも、父も昨年の暮れに七十歳で亡くなるまで、母は、私を産んですぐに死んでしまったと信じていたんですよ。

一之介 それはないでしょう。あなたに、そう言っただけで。

正太 いえ、たぶんそうです。

一之介 え？

正太 長岡さんのおとうさんは、小泉とわは死んだと思ってたはずですよ。それで、実は、僕のとうさんのせいなんですけど・・・。

三人 え？

隆 ・ ・ 正太くん、よかったら、最初っから・・・西貝さんのおとうさんと、小泉とわさんとの話から聞かせてもらえませんか。

正太を見る隆。一之介、二郎も。

正太

かあさんが、この家に住むようになったのは、戦後すぐだったそうです。戦争で両親をなくし、ひとりぼっちになってしまった十八歳のかあさんの面倒をみてくれたアメリカ兵がいて、その人が、この家をかあさんに与えてくれたらしいんです。一、二年の間、ふたりはここで暮らしていました。そのアメリカ兵には、国に妻子があつたので帰国してしまつたそうです。

二郎

ま、よくある話だよな、当時は。

正太

かあさんも、そう言つてました。で、かあさんに残されたのは、この家と、お腹の中の赤ん坊・・

一之介

え！？まさか、わたくしの上に、金髪碧眼のいさんがいるなんていうんじゃないだろうねッ。

じ

二郎

これ以上はごめんだぞ。

正太

あの時、あの子を産んでいたらつて、かあさんは言つてました。自殺なんかしなければつて。

三人

自殺？

正太

かあさんには、アメリカ兵との間にできた子供を産む勇気がなかつたんです。でも、このままでは、お腹の子は大きくなっていくばかり。追い詰められたかあさんは、烏賊岬から投身自殺をはかりましたが、そのかあさんを助けた人がいたんです。西貝京之介という東京の大学の先生です。

二郎

(一之介に) あんたのオヤジさんか。

正太

春休みに大学の研修で、この近くを訪れていたんです。かあさんは、身投げのショックで流産。西貝さんは、かあさんを病院まで連れていってくれ、

ここに戻ってきてからも、いろいろと慰めてくれて、どんなことがあつても自殺なんて考えてはいけないと、それは優しくさとしてくれたそうです。なるほどなるほど。

正太　そして、西貝さんとかあさんは結ばれました。

二郎　ええ!? なんだよなんだよ、さとすつてそーゆーことだったの。

正太　さとしてるうちに、情がうつったんじゃないでしょうか。

二郎　すごいねえ、大学の先生がやることは。いったい何歳だったのよ、その大先生は。

正太　西貝さんが四十五歳、かあさんが二十の春だったそうです。

二郎　ひええ、ほとんど、親子じゃねえの。好きだねえ、あなたのオヤジさんも。

一之介　四十五といえば、分別もあり、なおかつ、男ざかりでもある年頃です。当然の成り行きだったといえましょう。

二郎　そうかねえ。男ざかりはってのはよおつくわかるけどさ、若い娘を手込めにしといて、分別があつたとは、とても思えないねえ。

一之介　手込めとはなんだッ。父を汚す発言は許さないぞッ。その下品な言葉をただちに撤回したまえッ。

二郎　はいはい。お互い合意のもとで、と、そういうことですな。で、あんたが生まれた。めでたいねえ。

隆　めでたくはないでしょう。だって・・・

一之介　ええ、確かに。けれど、父には、正妻との間に子供がいまませんでした。東京の家には、父の母も同居しておりましたが・・・

隆　あなたが生まれたことを、東京の方々はご存じだったんですか？

一之介　ええ。わたくしは生まれるとすぐに、西貝家に入籍しております。しかし、わたくしは、いわば外にできた子ですから、東京の母は、すぐにわたくし

を引き取る気にはなれなかったようです。肝心の父もわたくしが生まれま前に亡くなってしまっていますし。ただ、祖母だけは、一刻も早く、わたくしを引き取りたかったようでした。父のあとを継がせて、大学教授にすることが、祖母の願いでしたから。

正太 何度か打診があったらしいんですが、かあさんは、一之介さんを手放す気はなかったと、そう言っていました。

一之介 かあさんは、幼いわたくしに、よくこう言いました。パパは王子様なのよ、ママを助けてくれた王子様。でもね、王子様にはお姫様がいるの。だから、いっちゃんは、ここで、ずっとママとふたりきりで暮らしましょうねと。  
・けれども、もともと体の弱かった東京の母が亡くなり、祖母はひとりになってしまい・・・心細かったんでしょね、わたくしが四歳になった正月、わたくしを引き取りに、ここにやってきたんです。

正太 事情を聞いて、かあさんは泣く泣く一之介さんを手放したと言います。

隆 じゃ、それから、あなたはずっと、おばあさんに育てられたってわけですか。

一之介 そうです。その祖母も、わたくしが、三十歳の時、亡くなりました。助教授になったわたくしを見届けるかのような死でした。百三歳でした。

二郎 へー、百三。  
息子と嫁の分、まとめて生きてたって感じですよね。

一之介 とにかく、今の話で、わたくしが、小泉とわさんに捨てられたというわけではないということが、おわかりいただけだと思います。

二郎 へえへえ、確かによくわかりました（隆に）ね。

正太 でも、かあさんは、またひとりぼっちになってしまったわけです。そして、その年の四月です。かあさんが、二度目の自殺をはかったのは・・・

一之介 え！？

隆 また、自殺？

一之介 また、烏賊岬から飛び込んだの？

正太 いえ、その年は春が遅く、外に出てみたら、まだ寒かったのでやめたそうです。

二郎 自殺するって人間が、寒い寒くないのなんて気にするのか？ねえ、刑事さん。

隆 案外、そんなもんらしいですが・・・。

二郎 ふうん。

正太 今度は首吊りです、ここで。

三人 え・・・。

正太 (見上げて) そのこの梁に、しめ縄をぶら下げて・・・。

隆 しめ縄？

正太 正月のお飾りについてたやつです。

二郎 ああいうもんは、松がとれると焼いちゃうもんなんじゃないの？

正太 なんかの役にたつかもしいないって取っておいたんでしょう。かあさん、なんでも取っとくクセがありますから。

一之介 昔の人は儉約家だから・・・。

隆 まあ、今ほど物が豊富ではない時代でもありましたかね。

二郎 いくら物がないたって、自殺すんだろ？ロープぐらい買ったらいいじやないか。小泉とわってのは、どこか変な女だな。

正太 そうなんです。でも、もつと変なのは、これから先のかあさんの人生です。

三人 え？

正太 この先は、とても素面じや話せません。

三人

・・・。

隆

(スーパーの袋から缶ビールを出して) 飲もう(ト、皆なに渡す)

一之介

わたくしはウーロン茶で。

プシュッとプルタブを開け、飲む四人。

二郎

よし、行け。

正太

かあさんが首吊りをしようとした、まさにその瞬間、その窓から忍び込んできた男がいました。

三人

え？

正太

鶴田三郎、四十歳、住所不定、前科三犯！

一之介

(二郎を指して) 君の父親じゃないか?!

正太

そうですッ。亀田さんのおとうさんは、この家に入ってきた強盗だったの

一之介・隆、二郎を見る。

二郎

いやあ、前科者だってことは知ってたが、小泉とわたのきっかけもそのテだったとはねえ。

一之介

か弱い女性ひとり暮らしの家に押し入るなんて、とんでもないやつだ。

隆

たいして金目のものがありそうとも思えない家を狙ったところを見ると、大方、強姦でもしようって魂胆だったんじゃないか。

正太

それぞれ。やりそうですよね、この人の父親なら。

三人、二郎をじっと見る。

二郎 （窓を指して）し、閉めとけよ、鍵をさッ。

一之介 自殺しようとしてたんですよ、かあさんは。そんなとこまで気がまわりませんッ。

二郎 け、けどさ、俺のオヤジが忍びこんできたから、小泉とわは死ななかつたわけだろ？

正太 まあ、そうです。鶴田はびっくりして、椅子を蹴ったかあさんを、こう抱きとめた。

二郎 やったじゃーん。

正太 そして、そのまま、かあさんを押し倒した。

三人 え?!

二郎 待てえーッ。ま、まさか、お、俺はその時の子だってンじゃ・・

正太 自分の生年月日から逆算してみてください。一九五三年四月の出来事です。ちなみに、その後、半年ほど、鶴田三郎には現れなかったそうです。

二郎 （指を折って計算する）ぴったりだ・・・。

一之介 なんていう破廉恥な。

二郎 あんたのオヤジとたいして違わねえよ。

一之介 違いますよッ。さとした後に結ばれるのと、一気に押し倒したのでは、天と地ほども違う。

隆 それで、その後、どうしたんだ、鶴田は？

二郎 ちょっと、そのツルタって言うのだが、呼び捨てはやめてもらえないか。あんたに言われると、犯罪者みたいな気がする。

一之介 犯罪者じゃないか。

二郎 昔の話だ。それにオヤジは、とつくに死んじまつてるんだ。俺にも一応、



親をかばうって気持ちはあるし。

隆 じゃ、その・・鶴田さんは・・

正太 さぶちゃんっていうのはどうですか？かあさんは、そう呼んでたみたいですよ。

隆 さぶちゃんねえ。

二郎 いいな。それでいこうよ。

正太 半年後、さぶちゃんは函館から戻って来ました。

二郎 お前、話、作ってないか。

正太 いえ、本当です。五島軒のクツキーを手土産に来たって話ですから。

二郎 ・・・いいとこ、あるじゃないか。

一之介 もともと住所不定の流れ者でしょ。函館から来ようが、沖永良部から来ようが不思議じゃないですよ。

正太 ええ、戻ってきてからも、あちこちふらふらしてたらしいですよ。でもまあ、二郎さんが産まれてからは、多少は烏賊浜に落ち着いてたみたいですけど、定職にはつかなかったって。それで、かあさんは、イカの加工工場で働きながら二郎さんを育てたわけです。

一之介 かあさんが、工場に？なんという・・。

隆 はやい話がヒモだね。

正太 そうですね。でも、二郎さんのことは認知してるんですよ、これが。そうなの？

正太 さぶちゃんには、事実上、離婚状態の妻がいたんですが、正式に離婚が成立したら、かあさんを入籍するつもりだったらしくて。

二郎 ・・いいヤツじゃねえか。なあ？

一之介 でも、ヒモじゃあね。入籍してもらったって、あんまり嬉しくないんじゃないや

ないですかね。

二郎 そんなことはないよ。女は喜ぶよ。小泉とわだつて、その日を待ってたんだろ？

正太 一応はそうみたいですけど、でも、その前に、さぶちゃんは死んでしまいましたからねえ。それにまた、その死に方つてのがねえ・・・。

二郎 え？それ話すの？

一之介 なになに。

二郎 とばそうよ、そこんどこ。

隆 この期におよんで、隠し事はよくないと思うな。

一之介 そうそう。

二郎 ……。

正太 かあさんから聞いた話によると、さぶちゃんは、二郎さんが三つの時に、酔っぱらって、烏賊浜公民館の裏のコエ溜めに落っこちて死んじゃったそうです。

一之介・隆 えー?!

二郎 最初のうちは、オフクロ・イクスに落っこちて死んだって言ってたけど。まあ、母親としては、真実を言いづらいでしょうねえ。

二郎 けど、すぐにわかったよ。近所のガキが、俺のことコエダメ二郎ってはやしたてンだもん。それに、オヤジが死んでから、粘土取り上げられちゃったし、俺・・・。

隆 粘土？

二郎 俺さ、粘土で遊ぶの好きだったのね。こう、丸めてのばしてき、ぽとんとおっことして、ウンコの音たてるの・・・かわいいだろ？

隆 ぜんぜん可愛くない。

一之介 かあさんを傷つけましたね、その下品な遊び。

正太 けど、災難でしたよねえ、さぶちゃんも。

二郎 オヤジがそんな死に方してから、セキを切ったみたいにオフクロの悪口も言われ始めてさ。お前のオフクロはただの淫売じゃなく、男をダメにする淫売だって。あんた（一之介）のオヤジさんは交通事故だし、俺のオヤジはコエダメだろ。まあ、戦後すぐにオンリーさんやってた頃から、村の人はオフクロのことをよく思ってたんだらうけど。俺、めっちゃくちゃ、いじめられたよ。

一之介 ひがみもあつたんじゃないですか。

隆 ひがみ？

一之介 世間というのは人の不幸の方が好きですからね。

隆 ちょっと待ってくださいよ。充分、不幸なんじゃないですか、小泉とわさんは。

正太 そうですよ。男運、めっちゃくちゃ悪いですよ。

一之介 今はそれでも、きっとまた、必ず、かあさんを助ける男が現れる。不思議なことに、かあさんには、次々と男が寄ってくる。そうじゃないですか？

正太 そりゃまあ、そうですね・・・。

一之介 いっそ、不幸を絵にかいたようだったら、同情してくれたんでしようがね。まあ、所詮、大衆とはそんなものです。その上、かあさんは美人でしたからねえ。美人というのは徹底的に不幸になるか、自分たちとは別世界の人なんだと人々に思わせるくらい幸せになってくれないと・・・世間の人は、許しちゃくれないですよ。中途半端にふしあわせ・・・かあさんの不幸は、そこんところだったんじゃないですか。

二郎 お言葉をかえすようですがね、西貝さん。

一之介 は？

二郎 小泉とわは美人ですか？

一之介 美人ですよ。抜けるように色が白くて、いつもまっしろなエプロンをかけて、豊かな髪をゆったりと束ねて・・・柔らかくて豊満な胸に抱かれると、石鹸の香りがしました。

二郎 ドドメ色のかつぼうぎ、来てましたよ。ボサボサの髪をゴムののびたヘアバンドでとめてました。デブで、俺のことひつつりあげた時、生臭い匂いがしましたよ。

一之介 きみの父親が、そんなふうにしてしまったんじゃないのか？信じられないよ。あんな清らかなあさんをイカの加工工場で働かせるなんて。石鹸の香りだって消えてしまうっつものだよ。かあさんを冒瀆するにもほどがある。

二郎 俺のせいじゃないよ。それに、いくら、オヤジがひどい男だったからって、俺を虐待しなくなっただっていいじゃないか。

隆 虐待ってとわさんがですか？

二郎 そうだよ。俺が近所のガキにいじめられるじゃないか。かばってくれんのが母親だろ。

隆 あえてつっぱねて、強い子に育てるっていう考え方もありますけど。

二郎 そういうんじゃないの。一緒になっていじめんの。コエダメ二郎ってアダナつけられたら、オフクロも一緒になって、そう言うんだぜ。おい、コエジロとか、ウンコジロくーんとか。

一之介 そんなこと、絶対、信じられない。君の下品な妄想だッ。

二郎 違いますね。ちゃあんと覚えてるさ。忘れようっただって忘れられないよ。

正太 それはその・・・つまり、かあさんは、場をもりあげようというか・・・。

二郎 何？

正太 あ、だからね、暗いわげじゃないですか、家庭が。ね、だから、せめて、オワライでも、持ってきてですね。

二郎 ……俺さ、さつきから、ずーっと思ってたんだけど、お前のさ、そういう無意味な軽さ？ぜんっぜん役にたたないケーハクさっての？……だいきらいなんだよなッ。

正太 す、すいません…。

一之介 君は、そんなことを根にもって、それで、かあさんに会いにいきたくないって、そう言ってるのか？

二郎 それだけじゃないね。そんなだけだったら……そりゃ、ガキの俺はえらく傷ついたけどさ、いつまでも根にもっちゃいねえよ。俺が、いっとう許せないのは、あの女が、俺を道連れに無理心中はかりやがったってことだよ。

一之介・隆 ええ…

隆 また、自殺をしたのか？えーと、何回目だ？

正太 三回目です。

二郎 その夜…オフクロは、俺に新品の服を着せて、自分もいっとういい服を着た。そうして、鏡台の奥から、真っ赤な口紅を取り出すと、口のまわりに塗った。それから、俺に、海の音を聞きにいっくよって言ったんだ。

隆 海の音？

二郎 海の音なんていやっていうほど聞いている。それでも、その夜、俺はオフクロになんとか逆らえず、手を引かれていった。けど、オフクロは海とは反対方向の駅の方に歩き出した。どのくらい歩いただろう、線路が見えてきた。オフクロは、線路に耳をあてて、お前もやっごらん、もうすぐ海

の音が聞こえてくるからって言った。でも、線路から海の音が聞こえてくるはずなんかないってことくらいは、いくらガキでもわかる。もうすぐ汽車が来るんだ。そしたら、オフクロと俺は轢かれて死んじゃう。俺はブルった。逃げようとしたけど、オフクロは俺の腕をぎゅうつとつかんで放さない。そのうち、ゴーツっていう音が・・確かに、海鳴りと似てなくもないような音が聞こえてきた。轢かれる！轢かれて、魚のすり身みたいになっちまう！・・俺は怖くて怖くて、シヨンベンをちびってしまった。その時、オフクロがふと言った。王子様が来る、きっと王子様が来て助けてくれる。

一之介

王子様・・・？

二郎

呪文みたいに、なんべんもなんべんもそう言った。俺は、そつと目を開けてオフクロを見た。あの時のオフクロの顔、今でも忘れない。口の端が上に持ち上がって、笑ってるようにもみえたけど、泣いてるようにも見えた。

イカが笑ってる・・なんだかわかんないが、その時、俺はそう思った。イカが笑ってる顔なんて見たことあるはずがない。なのに、俺はその時、そう思った・・・。ゴーツという音がすぐ近くまできた。オフクロが俺においかぶさった。ぐにやつという感じがして、目の前が真っ暗になった。

・・俺が覚えているのはそこまでだ。気がつくと俺は病院のベッドに寝て、おまわりさんの制服を着た人が俺を覗き込んでいた。

一之介

・・助けられたんだね？

二郎

ああ・・。その後、俺は、そのおまわりさんに連れられて、アカシア孤児院っていうところに行つて、中学を出るまで、そこで暮らした。孤児院の先生から、オフクロは死んだって聞かされた。けど、実は死んじゃいなかつたつたつて訳さ。オフクロはそれから、いっぺんだって俺に会いこなかつたぜ。俺は・・無理心中までつきあわされて・・俺は・・捨てられたのよ。

隆

・・・その、おまわりさんって・・・もしかすると私の父じゃないか・・・

二郎

え？

一之介

あなたのおとうさん、烏賊浜にいらしたんですか？

隆

ええ。三十の半ばに東京勤務になる前まで、海辺の町の派出所に勤務していたと聞いたことがあります。死んだかあさんとは、そこで知り合ったと。

かあさんは、若い頃から苦勞をした人で、父と出会った時は、生きる希望を失っていたと言っていました。無理心中のことや二郎さんのことは、何も聞いていませんが。

二郎

そうだろうよ。俺は孤児院に放り込まれたんだからな。ふんツ、俺を捨てて、自分は、新しい男とデキちまったってのかよ。いい気なもんだぜ。あんなのオヤジもオヤジだよ。

一之介

いや、それは違うんじゃないかな。この人のおとうさんは、たぶん君の將來を考えて孤児院にあずけたんだと思うよ。救出した際のかあさんの精神状態を思えば、暫くは療養の必要だっただろうし。

二郎

あとからはどうにでも言えるよな。でも、結局、あんなのオヤジにいろいろ世話になってるうちに、オフクロの腹ン中には、あんたができちまったんだろ。毎度お馴染みのパターンよ。いったい、なんべん同じことすりや気がすむのかね、小泉とわはよッ。

隆

偶然とはいえ、三回もとはね・・・。

二郎

ひよっとしてわかってたんじゃないか？自殺すれば必ず、誰かが助けられるって。それで、そのたびごとに、助けてくれたやつをモノにしてき。

一之介

そういう言い方はないだろう、君。

正太

必ず助けてもらえるなんていう確証はないのだから、それは、ずいぶんと危険な賭ですよ。

二郎 ところが賭けたわけよ、小泉とわは。どういうわけかき。

隆 父は、とわさんに結婚しようと言ったそうです。

二郎 おー、ひっかかったね、やっぱ。

一之介 口をつつしみたまえッ。

隆 父は独身でしたから、当然のことだったと思います。

二郎 俺のオヤジだつて結婚するつもりだったんだぜ（正太に）だろ？

一之介 君の父親のことはもういいよ。コエダメに落っこちちゃったんだから。

正太 でもね、かあさんは長岡さんのプロポーズにためらったと言っていました。

自分の過去を考えれば当然かもしれません。かあさんは長岡さんに言いました。私はクソ二郎を引き取って・・

二郎 おいッ。

正太 かあさんが言ったんですよお。

二郎 ほんとかあッ!?

正太 私は・・かわいいクソちゃんを引き取って、人さまの目を忍んで一生静かに暮らします。長岡さんの子は、申し訳ないけど、生めないって。

二郎 そーだよなあ。そうこなくっちゃ。で、墮ろしたんだろ、こいつンこと。

隆 ・・・あなた何言ってるんですかッ。

一之介 無視ッ。先ッ。

正太 でも、長岡さんは、二郎さんも引き取り、生まれてくる子と親子四人で暮らそうと言ったそうです。いい人ですよ、長岡さんて。

隆 そういう男なんですッ、父はッ。

一之介 でも、引き取らなかつたんでしよう。よかつたですよねえ。

正太 長岡さんがそこまで言ってくれたので、かあさんは、隆さんを産む決心をしたんです。今度こそ幸せになれるかもしれないって。でも、かあさんに



は、さらなる過酷な運命が待っていたのでした。つづく。さてと、ティータイムにでもしましょうか。

二郎　こら待て。その手にはのらねえぞ。話はまだ終わってないんじゃないやありませんか。

正太　だから、つづくって・・・。

二郎　この人（隆）のオヤジとできちまって俺が捨てられたのはわかったよ。けど、小泉とわは、この人も捨てたんだぜ。何でだよ。この人のオヤジさんも、小泉とわは死んだって信じてたってのはなんなんだよ。

隆　父の話では、かあさんは私を産んだ時の無痛分娩の麻酔が原因で、昏睡状態に陥ってしまったということでした。そしてそのまま、二カ月近く意識不明が続いて亡くなったと・・・。

二郎　そこまで詳しくわかってるのに、今でも小泉とわが生きてるってのは、どういうことなんだよ。あんたのオヤジさん、臨終にだって立ち会ってんだろ？

隆　いえ、とわさんが、まだ昏睡状態だった時に、父の勤務地がかわってしまったんです。それで、父は、まだ生まれて間もない私を連れて、烏賊浜を離れなければならなくなりました。父は言っていました。せめてあの時、母のそばにいてやれてたらと。けれど、間もなく、とわさんの死亡の報せが届いて、烏賊浜に来たら、もう骨になっていて、父は、なんとかっていう寺まで、遺骨を取りにいったそうです。

一之介　遺骨って・・・骨のことですか？

隆　そうです。

一之介　ほんとに、受け取ったんですか？かあさんの・・・ですか？

隆　そうです。

二郎　なんだよ、それ。おかしいじゃねえの。

正太　かあさん・・・一旦、死んだことは死んだんです・・・

隆　え？

正太　三十五年前の八月一日・・・あ、ちょうど今日ですね。

三人　今日・・・。

正太　かあさんの心臓はとまったんです。その夜、ここでお通夜がおこなわれたんですが、身寄りのないかあさんのことですから、ごくごく質素なもので。

一応、お坊さんが来て、お経をあげてくれるにはくれたんですが・・・延正寺というところの若いお坊さんで・・・。

隆　あ、それだ。その延正寺のお坊さんから遺骨を・・・待て。

正太　はい？

隆　そのお坊さんって・・・まさか、君の父親なんじゃ・・・

正太　えーッ、よくわかりましたねえッ。

隆　いや、さっき君が、父親は正研って名前だって言ったから。変わった名だになって・・・

正太　さすがするどいですね。お待たせしました。僕のとうさんの登場です。

二郎　待ってねーよ。

正太　僕のとうさんは延正寺の長男だったんです。で、かあさんのお通夜にお経をあげていたら、かあさんが蘇生して。

三人　そ、そせい!!

正太　そうなんですよ。奇跡ですよねえ。で、僕が出来たと。ま、そういうわけですね。

三人　へ？

二郎　こら、とばすなッ。

一之介　　そうだよ。それに、この人のおとうさんが遺骨を受け取ってるっていうのは、どういうわけなんだい。

二郎　　なんだか怪しくねえか、お前のオヤジはよ。

正太　　あんまり話したくないんだけどなあ。とうさんの名誉にかかわることでもあるし……。

二郎　　お前、人のオヤジのことバラしといて、名誉もクソもないだろーがよッ。

隆　　そうだよ。重大なことだよ。

一之介　　つつみ隠さず話したまえ。

正太　　……かあさんが、ふっと気がつくつくと、顔の上に白い布がかぶせられていて、お経が聞こえた。いったい私はどうしたのだろうか、とかあさんは思ったそうです。赤ちゃんを産んだのではなかったかしら？お腹をさわってみただけど、ぺっちゃんこ。長岡さんは？……かあさんが、そっと布をはずして薄目をあけてみると、線香の煙の向こうに、愛らしい顔のお坊さんがいる。僕、とうさん似なんです。

二郎　　そんなことどーでもいいッ。

正太　　かあさんが、どうしたらいいものかと途方にくれていると、ふと、お経が途切れたそうです。

隆　　途切れた？

正太　　そして、そのお坊さんは、きよろきよろとあたりをうかがい、ひとけがないことを確かめると……

二郎　　饅頭に手をのばした。あたりだろ？

一之介　　君はバカですか。

正太　　饅頭だったらよかったんですけど……その向こうのかあさんの体に手をのばし……

隆 え・・・。

正太 なんとこともあろうに、まさぐりはじめたのです。

三人 なんだってッ!!

正太 それから、お坊さんは、かあさんの体の上にまたがると、袈裟のすそを割

っ

た・・・。

隆 強姦だッ、死体損壊だぞッ。

正太 死体じゃありませんよ、かあさんは生き返ってたんですから。

隆 き、君のオヤジは死体だと思って犯したんだろ!

正太 そりゃまあ、そうなんですけど。

一之介 な、なんという破廉恥なッ。ビールをください。とても正常な神経では聞

いていられませんッ（ゴクゴク飲む）

二郎 とんでもねえ坊主だぜ。

正太 かあさんは当時三十一歳。その肉体はやや若さを失ってはいたものの、ま

だ充分に女の魅力にあふれていた。

二郎 お前になんでそんなことわかるんだよッ。

正太 かあさんがそう言ったんです。

二郎 なんだか、自分の男遍歴を自慢してねーか、小泉とわはよッ。

一之介 かあさん、かばってるんですよ、そのお坊さんのことを。若気のあやまち

だったと許してあげようと。若かったんでしょ?

隆 若くたって許されることじゃないぞ。

一之介 でも、そうとも思わなきゃ、こんな話、とつても・・・

正太 とうさんは、かあさんより、一つ年下の三十歳でした。

二郎 若かねーじゃん。立派な大人じゃん。新聞にだって名前がのるよ。そうだ

よね、刑事さん。

隆 そうた。オジサンAではすまされない年齢だッ。

正太 そうなんですけど・・・。

二郎 で、小泉とわの方はどうしたんだよッ。

正太 かあさんは、あまりのことに、ただもうびっくりしてしまつて、なすがままになつてしまつてたんだそうです。

一之介 なすがままになつて・・・

二郎 キュウリがパパつて言つたら殺すぞ。

一之介 ……にんじんしてしまつたの？

正太 そんなバナナ。

二郎 果物は違反だ。

隆 くだらないシャレを言つてなんで、先へ行けッ、先へッ。

正太 でもね、そんなことされちゃ、いくらかあさんだつて我慢できませんよね。

かあさんは思わず叫んだそうです。ああーんッ。

三人 ……。

二郎 ……そっちの我慢ができなかったのか・・・。

正太 びっくりしたのは、愛らしいお坊さんです。

隆 愛らしくないッ。

二郎 まさか、その時に出来たのが、お前だなんていうんじゃ・・・あれ？そんなのか？・・・なーんだ、お前もなしくずしで出来た子なのか。なーんだ、お揃いじゃないか。あはは。

正太 違いますよ。ハヤトチリしないでくださいよ。その時は、未遂に終わったんですから。僕が生まれたのは、出会ってから、五年後だつて言つてました。

一之介　　そうですよ、その時にできた子だったら、長岡さんと正太くんは年子にな

てしまうじゃありませんか。

二郎　　ま、そうだな。じゃ、五年間、ずっと愛人関係だったってわけか。

正太　　ええ。僕のとうさんは、僕が生まれる前に、別の人と結婚しました。確か、遠縁の娘とか。

一之介　　言っちゃなんですが、ずいぶんと不誠実な人ですね、君の父親は。

二郎　　通夜で強姦しようって生臭さ坊主だもん、あんた。

一之介　　それもそうですね。

二郎　　なんでもありませんじゃないの。ひよっとして、ほら、今はやりのロリコンとかシリコンとか、そーゆーのも、やっちゃってんじゃないの？

正太　　ロリコンとシリコンの意味、わかって使ってます？

一之介　　ま、いるにはいますね。そういう性の倒錯者というのは。文学の分野にも、いろいろ。

二郎　　あら、ご専門？

一之介　　若い頃、幻想文学をかじった関係で、ま、多少、そのテは。

二郎　　なになに、聞かせてよ。

一之介　　いえ、ですから、あくまでも芸術という観点から見た・・

隆　　（苛々して）先へ行けって言ってるだろッ。

一之介　　（同時に）　　そうですよ。

二郎　　そーだよ。

二郎　　で、どうしたんだよ。

正太　　え？なにがですかあ。

隆　　とぼけるなッ。とわさんが生き返ったのを見て、君の父親はどうしたのか

正太 　　って言うてんだ。俺のオヤジによこした骨はなんなんだって聞いてんだッ。  
やっぱり話さなくちゃダメですかあ？

二郎 　　全部、はけと刑事さんはおっしやつてるぞ。

正太 　　その刑事さんつてのが、やなんだよなあ。

隆 　　や、やっぱり、まだ何かやったんだな?!

正太 　　ほらね。

隆 　　まさか、誰か人を殺して、その骨を・

一之介 　　(隆に) ちょ、ちょっと落ち着いて。ね、長岡さん。あなた、捜査二課なんだから。殺人課じゃないんだから。

二郎 　　そうそう。そういうのはアレックスにまかせて。

正太 　　アレックスつてなんですかあ？

隆 　　んなことは、どうでもいいんだッ。

一之介 　　じゃ、こうしましょう。ちよつとの間、あなた、耳をふさいでて・

隆 　　何？

一之介 　　だって、正太くんが、あなたが聞いてちや話しづらいつて言うてるんですから。

二郎 　　俺が、後で、ちゃんと話してやつから。

隆 　　・・事実を曲げて伝えられる場合がある。

二郎 　　そんなことしないよ。事実をありのままに。

一之介 　　そうそう。ノミのパパに。

二郎 　　・・言われてしまった・・。

一之介 　　そうだ。じゃ、こうしましょう。(鞆からウォークマンを出して、隆に渡し) 長岡さん、これを聞いていなさい。

隆 　　なんです、これ。

一之介 アルファ波の出るミュージックです。心が休まりますよ。

正太 さすが、いつとう上の兄さんだなあ。

隆 ……(渋々、イヤホンを取り)ほんとに曲げないで話してくださいよ。

一之介 大丈夫ですって。

隆 (イヤホンを耳に入れる)

一之介 さあ、話しなさい、正太くん。

正太 実はね、ここからが男と女の不思議っていうのかなあ。兄さんたち、どう思います？

二郎 もったいぶらずに話せてンだよッ、この野郎。

正太 僕のとうさんは、びっくりたまげ、次の瞬間、自分のしてしまったことのとてつもなさに焦ったんでしょうね、かあさんに、なんとか事を内密にしてくれるようにと泣いて頼んだんだそうです。

二郎 なさけねー坊主だぜ。

正太 かあさんは、ますます途方に暮れました。生き返っただけでも、相当なスキャンダルものなのに、寺のあと取りとできてしまったなんて・・・けれど、泣いてすがるとうさんを見ているうちに、どうしようもなく、愛しくなっってしまったのだそうです。情といひかなんといひか・・・。

二郎 その情ってやつが怖いんだよな、小泉とわの場合はさ。

一之介 長岡さんはどうなるの？

太 そうなんです。生き返ってしまったからには、やっぱり、長岡さんと結婚しなくちゃならなくなる。

隆、ウォークマンをかけたまま、耳をすます。



正太　そしたら、僕のとうさんが、なんとか、このまま死んだことにはできないかと言い出したんだそうです。

一之介　死んだことって・・

隆、さらに、耳をすます。

正太　とうさんは言いました。あんたと一緒になれるんだったら、なんでもする。これできまりだったそうです。

二郎　どうきまつたってンだよ。

正太　とうさんは、寺に戻って、骨をみつくろってきた。

隆　(同時に)　なんだと?!

一之介・二郎　ええーッ!!

正太　あ、ズルだよ、ズル。アルファミュージック聞いてたんじゃないんですかあ。

隆　刑法第一八九条、墳墓発掘罪だッ!

正太　そうくると思った。でもね、お墓はお墓でも、動物のなんですから。

隆　な、なにイ!?

正太　延正寺は、ペット霊園も経営してたんです。当時としては、ずいぶん進んでましたよね。ペットの骨をね、かあさんの遺骨として、長岡さんに渡したと、そういうわけです。

隆　じゃ、じゃあ、父と俺は、こ、この三十五年間、どこの馬の骨ともわからないのを拝んでたつてのかッ。

正太　馬の骨じゃないですよ。猫か犬でしょう、たぶん。

隆　父はッ、母のために墓を作ったんだぞッ。去年、死んで自分も今、そこに

ッ

一緒に入ってるんだぞッ。犯罪だ！これは犯罪だッ！お前の親父はどこだ

逮捕してやるッ！

一之介 時効じゃないですか、もう。

二郎 そうだよ。三十五年も前のことなんだから。

隆 そ、そんなッ。

一之介 気持ちはわかりますが。

二郎 そ。けど、慣れなきや。俺なんかもう、なにがあつたつて驚かないって感じだな。

一之介 わたくしもです。

隆 で、き、きみの父親は・・・今、延正寺の住職をしてるのかッ。

正太 いえ、死んじゃいました・・・。

三人 え？

正太 僕が四歳の時に、選挙カーから落ちて、首の骨を折って。

二郎 お前のオヤジ、政治家になったのか？

正太 いえ、今東光の選挙カーです。

二郎 こんとーこー？

正太 知ってます？

隆 参議院に立候補した坊主だろ。

正太 そうです。今東光の応援のために、選挙カーに乗ってて落ちたんです。

三人 ……。

一之介 確か・・・今東光は・・・当選したよね。

正太 ですってね。

しーんとする。

二郎

・・・俺のオヤジも相当なもんだが、お前のオヤジにや勝てねえよ。

隆

なんだか・・・ものすごく疲れた。

四人、溜め息をもらす。

一之介、二郎、隆、座る。

隆、煙草を取り出す。

すかさず、ライターで火をつける正太。

多少、ムツとするが、つけてもらう隆。

一之介

それにしても正太くん。君、よく聞き出したね。かあさん、あんまり話したくないこともあったろうに。

正太

でも、逆に、なにかも話してしまいたいって気持ちもあったみたいです。女の人の、そういうの聞いてあげるの、僕、得意ですから。

二郎が煙草を取り出したのを見て、火をつける正太。

正太、自分の煙草を取り出し、一之介にすすめる。

一之介

いや、わたくしは、やめた・・・もらおうか（取る）

火をつける正太。

一之介、二郎、隆、同時に煙を吐き出す。

ひとり立って（まるで如才ないボーイのように）兄たちを見ている正太。

二郎 (煙草のさきを見つめながら) 氣イきくよな、末っ子は。

一之介 可愛がられますよ、正太くんみたいなのは。

正太、いえいえというふうに手など振ってひかえている。

隆 それにしても、小泉とわさんは、本当は・・・誰を一番愛してたんだろうな。

三人 え？

隆 いや、俺の父親は・・・その、あんまり愛されてなかったと思うけど。

正太 そんなことありませんよ。

二郎 そうだよ。一番いい人じゃないか。

隆 いい人が愛されるとは限らないよ。

二郎 でも、俺のオヤジや、こいつ(正太)のに比べれば・・・

一之介 長岡さん、遠慮することなんかありません。愛されていないなかったかもしれないという危惧が多少あったとしても、引けめを感じる必要なんてありませんよ。まわりの連中が連中なんですから。

隆 いえ・・・でも、なんだか、オヤジが可愛そうになってきて・・・だって、オヤジはかあさんは死んだものと、ずっと信じて、墓まで・・・(詰まる)

一之介 長岡さん・・・

二郎 誰だ、誰のせいだッ(正太を見る)

正太 ば、僕じゃありません。僕のせいじゃないよ。

隆 西貝さん。オヤジは再婚もせず、男手ひとつで俺を育てくれたんです。警察というのは、固いところですから、その・・・未婚の父なんて人はほとんどというか、俺が知ってるかぎりではひとりもおりません。もちろん、オ

ヤジは未婚ということは隠していましたが、何度も何度も再婚をすすめられたのに、頑なに拒み続けていました。小泉とわさんを忘れられなかったんだと思います。幼い俺を抱えてつらいことも沢山あったと思うのに・・・  
ほんとに、お気の毒でしたよね。

隆

晩年のオヤジは、酒を飲むと泣き上戸になりました。愚痴はこぼしませんでした。けれど、ひたすら泣くんです。泣きながら、浪曲子守唄を歌うんです。訳を聞いても、ただ歌うんです。女房がハモると、わざと音はずすんです。俺が、一緒に歌おうとすると、殴るんです。これって酒癖悪いですよ。

二郎

いや、立派です！

一之介

なんだよ、いきなり。

二郎

だって、リッパじゃないか。長岡さん、あなたの父上は立派です！

隆

けれど、立派な人が愛されるとはかぎりませんッ。

二郎

いや、男は立派にかぎります。立派じゃない男の息子の私が言ってるんですから、間違いありません。思えば、私は、幼い頃から“立派”に飢えていました。

隆

え？

二郎

十八の時に、ひっかけたのが今の女房です。そりやもう、セーラー服の裾はジベタにくつつきそうに長くしてるは、鞆はぺっちゃんこで、指の間にカミソリ挟んでるはで。そういう女を妊娠させたって罪にはなりませんでしょ？それなのに、あいつのオヤジは、俺のここんとこ（顎）に一発。グガッて、ものすごい音がしましたよ。チャームポイントの顎が砕けて、全治一カ月です。

隆

それはひどい。

二郎　　そうですよ。けど、どういうわけだか俺は、そのオヤジに、ぐっときちま

たンですよね。

隆　　え？殴られたのに、ですか？

二郎　　はい。おやっさんと呼ぶようになってしまいました。

隆　　それで結婚・・・

二郎　　ええ。不動産専門学校に真面目に通うという血判状を書かされて、養子縁組を。

隆　　ああそれで、鶴田姓から亀田に。

二郎　　そうなんです。今から思えば、ただの暴力オヤジじゃないですか。けれど、俺の実の父親ってのが、あんまり情けなかったもんだから、つい・・・。不動産屋のオヤジがホシイッテツに見えてしまったんです。

隆　　そうですか。そのおとうさんのおかげで、あなたは更生したんですね。

二郎　　はい。乱暴もので不器用なオヤジですが、やはり、立派な男だとわたくしは誇りに思っております。以上。

隆　　・・・しかし、その手の男は女には愛されませんね。

二郎　　そうでしょうか。

隆　　そうですよ。そういうふうに物事を単純にしか考えられないというか、融通がきかない男というのは、結局、バカをみるんです。正太くんの父親を、ごらんなさい。ペットの骨をみつくるってくるなんて恐るべき融通性だよ。

正太　　すいません。

隆　　君が謝らなくてもいいよ。

正太　　は、恐縮です。

一之介　　いいんですか、許しちゃって。

隆 いまさらしょうがないでしょう。それに、亀田さんの話聞いてたら、なんだか、亀田さんの義理のおとうさんや俺のオヤジみたいなのは、女に愛されなくてもしょうがないかなあというか・・・あきらめの境地に・・・。

二郎 お役にたてて幸いです。

正太 確かに、ちよつといい加減っていうか軽いところがある方が、女の人には受けるのかもしれないです。僕ね、性格もとうさんに似てるんですって。かあさんがそう言います。へんに我をはらなくて、人に甘えるってこと知ってるし。だから、小さい時から、近所のおばさんに可愛がられたんですよ。しょうちゃん、晩御飯たべてく？とか、プリプリオツパイさん作ったげるよーとかね。

一之介 (真剣に) プリプリオツパイさんて何？

正太 湯船に入ってたね、タオルをこう、ひろげて、まんまるい風船みたいな作るんです。で、指でプリプリって。

隆 あ、それ、やったな・・・。

正太 あ、長岡さんもやりました？

隆 うん。親父と一緒に風呂入った時、作ってくれた・・・懐かしいなあ。あれ、プリプリオツパイさんていうの？

正太 僕が命名したんです。

隆 あ、そういうのあったよね。子供の頃って勝手に名前つけちゃうんだよね。俺もさ、正月に親父がヤッコダコあげてくれた時、ヤッコダコが言えなくてね、ヤットコ、ヤットコって言ってさ。そしたら、大人になって知っただけけどヤットコってのあるじゃない。ほら・・・

二郎 釘とか針金とか引っ張るやつね。

隆 そうそう。

二郎 そういえば俺、一度、あれで虫歯抜けて、おやっさんに言われたことあ

っ

て。

正太 えー？ヤットコで。

二郎 そうだよ。俺のおやっさんてさ、医者が大嫌いなの。あん時はまいったよ

なあ。

隆 そりゃそうだよねえ。

正太 で、抜いたんですか？

二郎 抜かねーよ。そんなことしたら、この野郎、よくも俺を痛い目にあわせて

くれたなって言って・・・

隆 むちやくちやなオヤジだなー。

三人、笑う。

一之介 皆さん、いいですね。生き生きとした過去があつて・・・。

三人 あ・・・。

一之介、いじけている。

二郎 こちら・・・たしか・・・

隆 おばあさんに、ずっと・・・

一之介 ・・タコなんてあげてもらったことありませんよ。腰まがつってるから。

隆 いや・・・それはその・・・。



一之介 歯なんてぬいてあげたことないですよ。すでに抜けてますものッ。

二郎 いや、だから・・

一之介 プリプリオッパイさんなんて知りませんよッ。たれたれさんですもんッ。

しーん。

一之介、木馬をいじる。

二郎 西貝さん・・あの、もしよかったら、その木馬、持っていってもいいです

よ。

一之介 え・・・。

二郎 この家を買いたいなんて言っつて、あんたが欲しいのは、本当は、その木馬  
なんじゃないのか・・。

一之介 ・・・。

隆 西貝さんのおとうさんが、あなたのために買ってくれたものなんでしょう？  
あなた、持っていくべきですよ。

正太 かあさんもそのつもりなんじゃないかと思えます。

一之介 ・・かあさんが？

正太 僕ね、西貝さん。その木馬にいつぺんも乗せてもらったことないんです。

一之介 え？そんな。だつて、ずっとここにあったんだから・・。

正太 ええ、でも、かあさんに乗っちゃダメって言われてたんです。

一之介 ・・・。

正太 ずいぶん、だだをこねましたけど、かあさん、絶対だめっていうんですよ  
ね。なんでだろうつてずっと思ってたんだけど・・。

隆 それに乗っかってる二郎さんを見たあなたが、どんな思いをしたか・・幼

いあなたを傷つけたことを、後悔してたんですよ、小泉とわさんは。

正太 その木馬は一之介もの・・そう思ってたんだと思います。

二郎 西貝さん、この木馬、持ってってくださいよ。

一之介 あの時・・東京に引き取られてから一年後の夏、わたくしがここを訪れた時・・もし、二郎くんが、この木馬に乗っていなかったら、わたくしは、かあさんの胸にとびこんでいたかもしれません。そして、祖母は、わたくしを連れて東京に戻れなかったかもしれない。

三人 ・・・・。

一之介 帰りの列車の中で、祖母は言いました。一之介、見たでしょう、あの大きな顔の赤ちゃんを。あそこはあなたの家ではないのです。もう二度と、あの家に帰りたいなどと言ってはいけません。・・あの人は、あなたのお

かあさんではないのです　・　。

隆 おかあさん・・か・。

二郎 俺のオフロじゃあ・・なかったよ・。

正太 僕だけのかあさんでもなかったって・・思います。

波の音。

四人、ふと、窓の外を見る　・　暮色をおびている。

一之介 “バスをおりて海のおいがしたら・。

二郎 “イカホテルはどこですかときいてください・。

隆 “おかあさんとこに来てください”

正太 ・・・かあさんに会いに、一緒に行ってくださいませよね、兄さん・。

二郎 ・・・戻ってくるつもりなんてなかったぜ。あんたが、ここを買いたいっ

て来た時、さっぱりするって思ったよ。誰か他人のものになっちまえば、ただのボロ家だ。もう、イカホテルなんてよばれなくなるってね。

隆 イカホテル・・・そういうえば、どうして、この家は・・・

正太 イカっていうのは、烏を海の中に引きずりこんでしまうんだそうです。かあさんも、次から次に・・・まるで、お客でもとるみたいに男の人をひっぱりこんだって、世間の人には見えたんでしょうね。

二郎 イカの産地だからだとも思ってたの・・・それだったら、なんでホテルよ・・・。

一之介 確かに・・・。死んだふりをして海に浮かんでいるイカを烏がつかむとイカはやにわに烏をくわえこみ、海の中に引きずり込んで食べてしまった・・・そういう説話が中国にあるって聞いたことがありますね。

隆 死んだふり？

二郎 違いねえや。オフクロが死んだふりするたんびに、烏がちよっかい出してら。

隆 ……四羽、見事にひっかかったってわけか・・・。

一正太 烏もアホですよね・・・。

二四人 ……。

隆二郎 俺のオヤジも、強盗なんか入らなきや、いい年して、コエダメに落っこちることもなかったらうによ・・・。

一之介 ……やっぱり、四十五で二十の娘とつてのは、分別にかけましたね・・・。若気のいたりですまされることじゃないですよ、とうさんのしたこと。

隆 ちよっと待って。

三人 え？

隆 俺たちの歳・・・今の俺たちの歳って、もしかして、俺たちの父親が、かあ

さんと出会った歳じゃないか・・・？

顔を見合わせる四人。

二郎

ホントだ。俺たちや今、オヤジと同じ年になってるぞッ。

二郎の携帯電話が鳴る。

はっとする四人。

二郎

？（出て）はい・・・え？

正太

僕じゃないですか？ここ、電話ないから、亀田さんの連絡先を病院に・

二郎、電話を正太に渡す。

正太

もしもし、はい、そうです。・・・えッ・・・・。わかりました。すぐ行

きます・・・（二郎に返す）

二郎

どうしたんだ？

正太

・・・かあさんが、発作を・・・。

三人

！

正太

危ないって・・・危篤だって・・・。

イカの鳴き声。

思わず、窓の外を見る四人。

一之介  
イカが鳴いてる・・・。

隆  
え・・・？

一之介  
死んだふりして、鳥を食べてしまう鳥賊が・・・泣いてる・・・。

暫し、イカの鳴き声を聞く四人。

二郎  
・・・まさか、また、死んだふりじゃねえだろうな・・・。

隆  
え？

二郎  
だからよ、また死んだふりしてよ・・・（後の言葉が続かない）

四人  
・・・。。。

正太  
だったらいいけど・・・。

二郎  
え？

正太  
僕らが会いに行って、もし、かあさんが持ち直してくれたら・・・やっぱり

僕は・・・嬉しいよ・・・。

三人  
・・・。。。

イカの鳴き声・・・波音が消してゆく。

隆  
で・・・今度は、誰が鳥なんだろうな・・・。

思わず、顔を見合わせる四人。

音楽（CASA BIANCA）

四人の男たち、誰からともなく視線をそらす。

そして、四人は、それぞれの心の中で母をおもう。

・・・正太を見る隆。

正太、その目を受けて・・・ふたり、二郎を見る。

二郎、視線を感じて、ふたりを見る。

三人、一之介に目を向ける。

うつむいている一之介。

見つめる二郎、隆、正太。

静かに顔をあげ・・・かすかに微笑む一之介。

一之介

・・・行こう。

その言葉を合図のように、ドアへ向かう四人。

二郎、ドアを開ける。

夕焼けと浜の匂い、そして、イカの鳴き声が、そこから入ってきて・・・

あたかも四人を包むかのようだ。

その四人の男たちの後ろ姿、印象的に残って

木馬が、かすかに揺れる。

鳥賊の鳴き声、激しくなる。

音楽、大きくなり・・・。

幕。